

治療開発研究 — まとめ —

北 川 照 男

日本大学医学部 小児科

糸球体腎炎の治療に関しては、古く安静、保温、食事療法が主体とされてきたが、近年腎炎の発症、進展機構が解明されるに伴い、これらの機構を抑制する多様な治療法が開発され、使用されつつある。特に、ステロイド剤、非ステロイド系抗炎症剤、免疫抑制剤、抗血小板剤、抗凝固線溶剤等が使用されており、その効果が確認されている。しかし、腎炎の病型は多様であり、その発症機構や進展機序も単一でないので、効果的な治療法を開発するには小児腎疾患研究者のみならず、薬理学、免疫学、病態生化学、病理学および成人腎臓病学の専門家の協力を得て、総合的に研究を進めることが重要である。

特に、その治療法の開発は病因論的な立場から進めることが重要であり、これは「小児腎炎の病態病理に関する研究」班が中心となって行い、その発症病理を形態学的、免疫学的、生化学的に研究を行い、慢性腎炎の各病型の治療法を開発する上で参考となる多くの基礎的な研究が行われた。

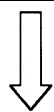
また、小児慢性腎炎の治療法は、各病型によって異ると共に、夫々の病型においてもその病期によって選択する薬剤が異なるので病型診断と病期の判定は臨床的に重要である。そして、この方面の研究は「小児慢性腎炎の病型診断に関する研究」班が担当し、多くの貴重な知見を得ると共に、治療効果を病理組織学的に判定するための基礎的な研究が行われた。

小児慢性腎炎を治療するアプローチとして、抗体産生の抑制、免疫複合体形成の抑制、細胞性免疫の機能の正常化、毛細血管透過性の抑制、

血液凝固の抑制、血小板機能の抑制、プロスタグランジン生成の抑制、基底膜陰性荷電の保持などいろいろな方法があり、研究されているが、これらの臨床的效果の研究と病態生化学的、病理学的研究が「小児慢性腎炎の薬物療法に関する研究」班で行われ、各種薬物の作用機構が徐々に解明され、各病型や病期における夫々の適応を考える上で参考となる知見が得られた。

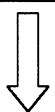
このような慢性腎炎の予後は各病型で異なるが、そのうちでもステロイド剤治療に抵抗するネフローゼ症候群の臨床像を呈する慢性腎炎は一般に予後が悪く、その治療法の開発は臨床的に重要である。特にこの病型をとりあげて、その病型診断や治療法や予後を判定する研究は「ス剤抵抗性ネフローゼ症候群に関する研究」班が担当した。この研究班はス剤抵抗性の症例のみならず、頻回に再発する難治性の症例も含めて研究し、各病型の診断と治療についての研究ではかなりの成果を得ている。

以上のように本年度は本研究班が発足して間もない初年度であるにもかかわらず、治療開発研究班としてはかなりの研究成果を収めることができた。そして各病型についての治療薬剤の撰択基準や治療基準を設定する上で、基礎となる研究成績を得ることができた。最終年度までに本研究の成果を通じて小児慢性腎炎の予後が飛躍的に改善されることを切に望むものである。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



治療開発研究 - まとめ -

北川照男

日本大学医学部 小児科

糸球体腎炎の治療に関しては、古く安静、保温、食事療法が主体とされてきたが、近年腎炎の発症、進展機構が解明されるに伴い、これらの機構を抑制する多様な治療法が開発され、使用されつつある。特に、ステロイド剤、非ステロイド系抗炎症剤、免疫抑制剤、抗血小板剤、抗凝固線溶剤等が使用されており、その効果が確認されている。しかし、腎炎の病型は多様であり、その発症機構や進展機序も単一でないので、効果的な治療法を開発するには小児腎疾患研究者のみならず、薬理学、免疫学、病態生化学、病理学および成人腎臓病学の専門家の協力を得て、総合的に研究を進めることが重要である。

特に、その治療法の開発は病因論的な立場から進めることが重要であり、これは「小児腎炎の病態病理に関する研究」班が中心となってい、その発症病理を形態学的、免疫学的、生化学的に研究を行い、慢性腎炎の各病型の治療法を開発する上で参考となる多くの基礎的な研究が行われた。

また、小児慢性腎炎の治療法は、各病型によって異ると共に、夫々の病型においてもその病期によって撰択する薬剤が異なるので病型診断と病期の判定は臨床的に重要である。そして、この方面の研究は「小児慢性腎炎の病型診断に関する研究」班が担当し、多くの貴重な知見を得ると共に、治療効果を病理組織学的に判定するための基礎的な研究が行われた。

小児慢性腎炎を治療するアプローチとして、抗体産生の抑制、免疫複合体形成の抑制、細胞性免疫の機能の正常化、毛細血管透過性の抑制、血液凝固の抑制、血小板機能の抑制、プロスタグランジン生成の抑制、基底膜陰性荷電の保持などいろいろな方法があり、研究されているが、これらの臨床的効果の研究と病態生化学的、病理学的研究が「小児慢性腎炎の薬物療法に関する研究」班で行われ、各種薬物の作用機構が徐々に解明され、各病型や病期における夫々の適応を考える上で参考となる知見が得られた。

このような慢性腎炎の予後は各病型で異なるが、そのうちでもステロイド剤治療に抵抗するネフローゼ症候群の臨床像を呈する慢性腎炎は一般に予後が悪く、その治療法の開発は臨

床的に重要である。特にこの病型をとりあげて、その病型診断や治療法や予後を判促する研究は「ス剤抵抗性ネフローゼ症候群に関する研究」班が担当した。この研究班はス剤抵抗性の症例のみならず、頻回に再発する難治性の症例も含めて研究し、各病型の診断と治療についての研究ではかなりの成果を得ている。

以上のように本年度は本研究班が発足して間もない初年度であるにもかかわらず、治療開発研究班としてはかなりの研究成果を収めることができた。そして各病型についての治療薬剤の撰択基準や治療基準を設定する上で、基礎となる研究成績を得ることができた。最終年度までに本研究の成果を通じて小児慢性腎炎の予後が飛躍的に改善されることを切に望むものである。